

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

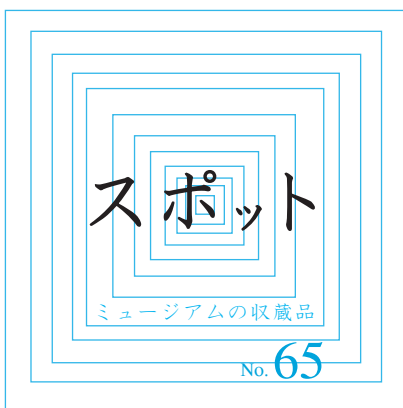
Vol.24-1 (通巻 68号) 2016.8.19 発行



ジャワ新聞社『ジャワ・バル』(南方軍政関係史料; 8、龍溪書舎、1992)

Contents

- 01 スポット：ミュージアムの収藏品 65
『あたらしい憲法のはなし』
- 02 巻頭つれづれ
自主規制と配慮の間
- 04 着任のごあいさつ
敵を制するのは武器と水？
- 05 平和研究
国際平和ミュージアム・平和研究センターについて
- 07 平和研究
「メディア資料研究会」、始動
- 08 新収蔵資料データベース検索システム Peace Archives 公開
- 09 運営委員リレー連載
独立記念館との交流から東アジア相互理解への道を考える
- 11 ミュージアムおすすめの一冊
『ナナムの家のハルモニたち 元日本軍慰安婦の日々の生活』
- 12 事業報告



『あたらしい憲法のはなし』

また、わかりやすいイラストを交えながら展開されているのもこの本の特徴です。憲法という陽が「民主主義」「国際平和主義」「主権在民」の考え方に基づく国民や社会を照らすイラスト（画像1）や、戦争放棄の釜で軍艦や戦闘機を燃やして鉄道や建物に変えていくイラスト（画像2）は、今でも様々な場所で目にする象徴的な存在となっています。

『あたらしい憲法のはなし』の発行は連合国軍総司令部民間情報教育局教育課の特別教科書プロジェクトの要請によるものでした。当初予定の副読本から、正規の教科書に切り替わり、新学制のもとに新たに設置された「社会科」で使用されました。敗戦により軍国主義的教育から新しい教育へ移行した頃の初期の「社会科」は、子どもたちを民主主義の担い手に育てることを目的に小学校1年生から高校3年生までの中で、社会認識の形成と発達に関わる科目と位置づけられていましたが、この本が教科書に格上げされ、物資の不足する中でしっかりと配布された背景には、GHQによる占領政策としての民主主義の浸透や日本の非武装化の狙いがありました。そのため、国際情勢が転換した1950年には副読本に格下げされ、1952年には教科書から取り下げられました。

しかし、『あたらしい憲法のはなし』は現在まで繰り返し復刻され、今でも様々な場面で引用されています。この本は多くの人々の目に触れて広まるとともに、憲法について理解するために、そして戦後の社会を築く上で重要な役割を果たし、共有されてきたものであることがわかります。



『あたらしい憲法のはなし』
縦：17.8cm 横：12.7cm
年代：1948年

この資料は、1947（昭和22）年8月に文部省が新制中学1年生向けの教科書として制作し、実業教科書株式会社が発行した『あたらしい憲法のはなし』の翻刻版（増刷）です。翌年の2月に京都市右京区太秦の大日本印刷株式会社で印刷されました。執筆には浅井清が携わったことが記されています。

全体的に変色、劣化が進み、ページの端にも細かい欠損があります。

表紙には黄色で国会議事堂が描かれていますがインクが退色し、はじめて見る人にはその形を捉えにくい状態です。こうした酸性紙の資料はその大半がすでに劣化に悩まされていますが（和紙で出来た資料は保存状態がよければ数十年でこのような状態にはなりません）、もともとの作りもホチキスでとめられた簡素なものです。しかし、この当時、他の教科では、教科書が無い、墨塗り教科書、上級生のおさがり、手作りテキストでのやりくりといった状況であったにも関わらず、『あたらしい憲法のはなし』は、生徒全員に製本された新品の教科書が配られたことを多くの人々が記憶しています。

中を開くと、表紙に続き、扉にも国会議事堂のイラストが描かれています。全体は15章、全53ページです。文章は語りかけるような表現で、冒頭は、「みなさん、あたらしい憲法ができました」という呼びかけで始まります。憲法の全章に即して解説する構成ですが、最初の4章は、憲法前文の役割と、憲法の根幹となる「民主主義」「国際平和主義」「主権在民主義」についての説明に割かれており、どのような考え方を頼りに、どのような社会を目指すのか、なぜそれが必要なのかを中学1年生と共有するために丁寧に説明をしています。（画像2）



（画像1）同 5 頁より



（画像2）同 19 頁より

* 『あたらしい憲法のはなし』はインターネット上の「青空文庫」で公開されています。

http://www.aozora.gr.jp/cards/001128/files/43037_15804.html
* この資料は第103回ミニ企画展示「ミュージアム この1てん」（2016年9月13日（火）～10月2日（日））にて展示いたします。

（学芸員 兼清順子）

巻頭 つれづれ

自主規制と配慮の間

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長 安齋育郎
(立命館大学名誉教授)

イギリスの EU 離脱

2016年6月23日、イギリスがEU（欧州連合）の一員として残留すべきか、離脱すべきかを巡る国民投票があり、「離脱 = 51.9%」対「残留 = 48.1%」で、離脱が「選択」されました。国論を二分する僅差の「決定」です。そういえば、日本でも2015年5月17日、「大阪都構想」を巡る住民投票があり、「反対 = 50.4%」対「賛成 = 49.6%」という微差でした。

両方のケースともほぼ「五分五分」というべき状況ですから、これを「民主的な選択」あるいは「民主的な決定」と呼ぶべきものかどうか、議論があるでしょうね。

大阪の場合は、一つの地方都市の問題であった上、「現状を変えないこと」で決まったのであまり重大な問題には発展しなかったように思いますが、イギリスの場合は、「グレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国」(UK, The United Kingdom of Great Britain and Northern Island) という国家のあり方に関する問題で、しかも「現



長野県上田市の標識

状を変えること」を決めたことになるので、大変です。「国運を左右するような重大事を、こんな僅差の投票結果で決めることはどうなのか？」という疑問が起こり、果ては、直接民主主義の「伝家の宝刀」としての「二者択一式国民投票」の危うさを象徴しているかのようでもあります。

左下の写真は、2016年6月5日に長野県上田市の「無言館」で開かれた「無言忌」に出席した時に、上田の街中で撮ったものです。「右を見て、左を見て、とまれ」ですね。この標識は、「直進する人向け」に「左右確認」を促しているものです。この標識に行き当たった人は、そのまま直進する前に立ち止まり、車が左右から来ていないかどうか安全確認をしてから進みなさいという意味ですね。全国どこにでも、とくに保育園や小学校の近くにはいろいろなバージョンの同種の標識があります。

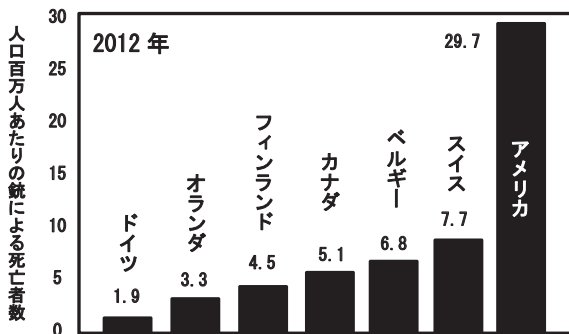
ところが、イギリスの国民投票は、「真っ直ぐ歩き続けるか、直進路から外れて脇道に踏み込むか」を選ばせるものでした。「今まで歩いてきた道には、いろいろな人々が脇道から合流してきて身動きが取れず、道がだんだん狭くなって、先行きが見通せなくなっているように感じる」。かと言って、「この道は窮屈だから、この際わが道を選んで脇道に入れば、先行きどんないばらの道が待ち受けているか分からない」。さあ、どうする？道先案内人も「この道を行けば大丈夫！」という明確な見通しを指し示すことができないまま、「そんならみんなでジャンケンで決めてよ」と投げ出した感じがしなくもありません。

政治のあり方には、アリストクラシー (aristocracy、貴族政治)、オートクラシー (autocracy、独裁政治)、ビュロクラシー (bureaucracy、官僚政治)、デモクラシー (democracy、民主政治) など歴史的にいろいろな形態が現れましたが、今日多くの国で「民主政治」が目指されています。demo (民衆、人々) + cracy (政治、支配) で、人々が政治のあり方を決めるような政治制度ですが、そこにも、選挙で選ばれた議員による「代議制民主主義」と、(通

常はそれを補完するものとして) 国民投票のような「直接民主主義」の手法があります。イギリスの EU 離脱をめぐる問題では、代議制民主主義の枠内で議論が尽くされぬまま、安易に直接民主主義的手法に国家の命運を預けてしまったのではないかという議論も出ています。

アメリカの銃乱射事件

話は変わりますが、アメリカでは「銃乱射」による殺傷事件が後を絶ちません。図に示した 7 か国の中でも、人口百万人当たりの銃による死亡者数は、アメリカがダントツです。



アメリカでは、銃によって命が失われる事件は、乱射事件や自殺や事故を含めて、年間 3 万人程にも達します。痛ましい犠牲者が出るたびに、アメリカでも大きなニュースになり、被害現場には多数の花束が供えられ、大統領が哀悼のメッセージを発する—そのような映像を、私たちはたくさん見てきました。

しかし、アメリカ憲法修正二条には「人民が武器を保有し、またはそれを携帯する権利を侵してはならない」と定められており、銃は街の銃砲店で比較的簡単に入手可能であり、実際、全米の一般家庭には何億丁という銃が保有されており、それを規制しようとする「全米ライフル協会」(NRA, National Rifle Association of America) という強力な圧力団体が反対運動を展開します。「子どもの 3 歳の誕生日に両親が銃をプレゼントした」といったニュースを聞くたびに、アメリカ社会から銃をなくすことは容易なことではないと感じますが、かと言って、市民の良識ある管理や行動に委ねて銃の保有や携帯を今のままで認め続けるのは、少し不気味な感じがします。異民族間の対立を煽るような政治傾向や、国際的なテロリスト集団の活動などに関するニュースを耳にするにつけ、ますます不安が高まります。

開拓時代以来、自分の身は自分で守るという考え方が染みつき、ついに、国家の次元でも核武装するまでに至った

アメリカという超大国には、「武器による自衛」という問題については日本とは異なる長い歴史があるだけに、それこそ「国民投票」で一気に決着をつけるようなことはできようはずもありません。迂遠なようですが、学校教育や社会教育のさまざまな機会に、銃社会という点でアメリカがいかにか尋常でない状況なのかについての認識を徐々に広めつつ、国際社会も、武力に物を言わせて対立を決着させるような考え方や行動を慎み、より平和的な紛争解決の事例を着々と増やして、互いの信頼関係を深める努力を愚直に進める以外にないのでしょうか。

自主規制と配慮の間

憲法や平和についての小中学校の講演を頼まれた場合、私は、できるだけ私の考え方を一方的に押し付けることがないように心がけます。価値観の形成途上にある義務教育年次の子どもたちに、特定の価値観を押し付けがましく話すことには抑制的でなければならないでしょう。ドイツの社会学者マックス・ウェーバーは、「教壇禁欲」という言葉を使いました。

しかし、実際上、それはなかなか簡単ではありません。例えば、銃社会のアメリカの公教育の場で、「命の尊さ」について語りかけることは大変大切なことに相違ありませんが、「だから銃の保持や携帯は規制されるべきだ」と言えば、たちまち「憲法で認められている権利を公教育が否定するのか？」という批判にさらされる可能性があります。

イギリスの EU 離脱問題にしても、日本の憲法や安全保障や原発問題にしても、それらを公教育の場で取り上げる場合には同じようなある種の「配慮」が必要となります。配慮のレベルは問題の性質や教育が置かれている環境によっても違いますが、少なくとも、「こんなことを言えば批判されるのではないか」と萎縮して「自主規制」し、それらの重要なテーマについての本質を伝えることをいい加減で済ませるようなことは本意ではありません。まずは、それらの問題について生徒たちが判断する場合に必要な基礎的諸事実をきっちり伝え、「自己の絶対化」に陥らないように配慮しつつ多角的な見方を紹介し、全体として、右を見て左を見て自分なりの道を見きわめられる力量をつけるのに貢献すること—いつも子どもたちに語りかけながら「今日は有効な語りかけができただろうか」と反省する日々です。国際平和ミュージアムの活動も、そうした賢い配慮を必要としているのでしょうか。

着任のごあいさつ



敵を制するのは武器と水？

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長 中島 淳
(立命館大学工学部教授)

五大湖の富栄養化モデルで著名なスティーブン・チャプらは、工学というものはもともとミリタリー・エンジニアリング（軍隊の工学）とシビル・エンジニアリング（市民の工学）の二つのタイプしかなかったとしています。前者は戦争ための技術を扱い、後者は生活のための技術を扱うものだったといえます。やがて産業革命によって様々な技術が生まれ、こうした新しい技術を発展させる工学が必要となりました。その結果、電気工学、機械工学、化学工学などの分野が誕生し、市民の工学から独立してゆきました。そして、20世紀初頭には、シビル・エンジニアリングの対象はたいへん限られたものとなり、都市の基盤建設や計画・管理の技術を扱う分野になりました。都市に安全な水を供給する上下水道など水インフラ関連技術は、縮小された市民の工学の対象として残存しました。ちなみにシビル・エンジニアリングは、我が国ではその導入時から長い間、土木工学と呼ばれています。

「水の生活科学（改訂版）」という本が手元にあります。昭和18年4月が初版発行で、手元の本は昭和19年2月の改訂三版で、3000部の出版と書かれています。著者は陸軍軍医学校の嘱託で、巻頭には当時の校長である陸軍軍医中將の序文が載せられています。そこでは、「大東亜共栄圏の確立を眼前にして、吾人の活動領域は広大無辺……従って、是等共栄圏各地の水に関する常識の獲得は、喫緊事の一と断じても過言ではなからう。」と述べられています。また、本文の二つ目の章が「戦争と水」と題され、「水と兵隊」、「空襲と水」、「築城と水」、「艦船と水」という節が置かれ、「制敵の第一弾が武器であれば追撃、猛進を完からしめる第二弾は水であるとも言へます。」とし、「水を求める皇軍に清冽な濾過水を配給する給水員の活動にはまた非常な苦心がいろいろあります。大陸の生水は不潔な上に更に謀略的に汚染されることも考へられます。

従って安全な麗水を配り廻るのが給水員の重要な役目です。」と書かれています。

ご挨拶が遅くなりました。今般、立命館大学国際平和ミュージアムの副館長の役目を仰せつかりました工学部の中島と申します。環境システム工学科の教学・研究に携わってまいりましたが、水環境工学とくに水処理・水再生を主たる研究対象としております。水処理とは、汚れた水をきれいにしたり、飲用などいろいろな用途に合った水を造る技術ですが、この内容について学部3回生を対象とした「水処理工学」という講義を担当してきました。ところで、「水の生活科学（改訂版）」の抜粋でご理解いただけるように、水処理技術はミリタリー・エンジニアリングの重要な研究対象でもあるのです。

本書には88葉の写真が載せられていますが、前線での兵隊への給水の様子や濾水機の運搬などの写真に加えて、濾過器の構造やナチスドイツの兵用濾水機、またベルケフェールド濾過陶管などの水処理技術の写真も掲載されています。日本の陸軍では石井式濾水機が有名ですが、これはベルケフェールド濾過陶管のようなセラミック膜濾過技術で、その研究開発者は後に関東軍防疫給水本部（つまり七三一部隊）の部隊長となりました。水系感染症を引き起こす細菌を濾別することができる孔径なので、現在の精密膜濾過（MF）という技術に相当します。

前期末から今日にかけて、シビル・エンジニアリングが対象とする水処理技術においては、より細かな孔径の膜濾過技術と同様に、精密膜濾過の様々な応用が急速に拡大しています。下水を処理する細菌群集（活性汚泥といいますが）を分離するのに用いられはじめたMBR技術は、下水の再生再利用の重要なプロセスの一つとなりました。実はMBRは、私の研究室の主要研究テーマの一つでもありました。また、バングラデシュの飲用地下水の砒素汚染対策では、現地の大学およびNGOとの共同研究で、砒素を吸着した酸化鉄フロックを濾別するのに、簡易で安価なセラミック膜を現地材料で製作して用いています。さらに、アジアを対象とした生活雑排水の再生再利用の研究でも、精密膜濾過などの膜分離技術は重要なプロセスの一つです。

「水処理工学」の講義では濾過の学習時間に、「水の生活科学（改訂版）」に載せられた数葉の写真を学生に見せています。市民の工学で扱う技術が、侵略戦争でも重要な研究対象であったこと、水は武器に次ぐ敵を制する第二弾と言われたことも、若者に知っておいて欲しいと考えています。

- ・ Steven C. Chapra: Surface Water-Quality Modeling, McGraw Hill, 1997
- ・ 村上秀二: 水の生活科学（改訂版）、柏葉書院、1944

国際平和ミュージアム・平和研究センターについて

立命館大学国際平和ミュージアム 平和教育・研究セクター長 加國尚志（立命館大学文学部教授）

1 「平和研究センター(仮称)」の開設について

立命館大学国際平和ミュージアムでは、2016年10月に「立命館大学国際平和ミュージアム・平和研究センター(仮)」の開設を計画しています。

国際平和ミュージアムは、1992年の開設以来20年余にわたり戦時中の歴史資料を中心とした展示活動、資料収集・保存・利用提供、教育・普及活動を行ってきました。2005年2月に国際平和ミュージアムは博物館法に基づき「博物館相当施設」として認定を受け、博物館法第2条・第3条にもとづき、博物館として専門的、技術的な調査・研究活動を充実させていくことになりました。

今回開設される「平和研究センター(仮)」は「国際平和ミュージアム」で行われてきたこれまでの平和博物館としての研究の蓄積を踏まえ、総合大学としての立命館大学の利点を生かし、平和研究、地域問題、人権問題などの研究とともに、平和博物館において必須となる資料研究、展示研究、教育普及活動を行い、国際平和ミュージアムの活動の充実をはかる機関となることをめざしています。

具体的には「歴史の記憶の継承」「21世紀の平和構築」「平和博物館ネットワーク」を軸とした研究プロジェクトを立て、それらの成果を国際平和ミュージアムでの博物館展示、紀要『立命館平和研究』の発行、講演会、シンポジウム、セミナー等を通じて公開・発信していきます。

2 「平和研究センター(仮)」の研究の特色と理念

本センターで行われる研究の特色は、立命館大学の教育理念「平和と民主主義」に基づく研究を行う点にあります。

これまでの国際平和ミュージアムでは、おもに二階常設展示部分に関わる「平和研究」(平和学、国際関係論、平和構築論、国際人権研究)、地階常設展示部分に関わる「歴史研究」(ミュージアム所蔵の4万点に及ぶ歴史資料の研究、戦争経験者・資料提供者へのインタビュー、ナラティブ研究、戦前・戦後史研究、東アジア史研究)、特別企画展や常設展示の展示技法と関わる「博物館研究」(展示技法研究、資料保存研究、映像資料展示研究、博学連携研究)が行われてきました。

それらの研究には、長年にわたって立命館大学の多くの教員と学芸員が共同で取り組んできた試みがたくさんあります。

たとえば2012年には安斎育郎名誉館長監修で「放射能と人類の未来」展を行い、福島原発事故後の放射能の影響について放射線防護学に基づく展示が行われましたが、その際に映像学部の大島登志一教授制作によるヴァーチャル・リアリティによる原子炉の再現展示や、渡辺修司准教授のゼミ生たちによる「ゲーム」による放射能学習の試みなど、映像やゲームなどの視覚や体感による展示技法が試みられました。自然科学的な内容と映像やゲームの展示を結びつける試みは、総合大学にある平和博物館だからこそできる企画でした。

また、2013年度には「モノが語る戦争の記憶」と題して、岩井忠熊本学名誉教授のインタビュー映像を鈴木岳海映像学部准教授の協力のもとに制作しました。これは、戦争経験者の語りを映像資料として残すと同時に、映像や音声による戦争の記憶の体験を目指した展示として、歴史資料研究と映像技術を結びつける試みでした。ここでも資料研究、映像技術研究、博物館展示研究の連携によって博物館展示の新しい方向を切り開くことができました。この映像資料は、現在、地階常設展示において閲覧可能です。こうした歴史研究と映像技術を融合させる研究を豊富化することで、国際平和ミュージアムから平和博物館展示の新しい方向性を発信させることが期待できます。今後、こうした研究と博物館展示の協同の試みを「研究」という形で実質化していきたいと考えています。

また、2012年より開始した4万点に及ぶ資料の整理も終了し、「Peace Archives」としてデータ・ベース化しましたが、この整理作業においても、多くの大学院生や学芸員資格取得者が協力しています。3年間に及ぶ資料整理作業を通じて、国際平和ミュージアム所蔵の資料の全貌が明らかとなり、データ・ベースとして内外の研究者にアクセス可能となりましたが、その作業に従事した立命館大学院の若い歴史資料研究者たちにとっても、現物の資料整理を通じて歴史資料研究の成果を生む基礎的な経験となったのではないかと思います。やはり平和博物館の生命は歴

史的資料ですが、その資料の整理作業や保存方法に習熟することはもちろん、それらの資料の歴史的価値や意義を理解することは、歴史研究者、博物館研究者にとっても重要な研究作業です。今後、展示研究や資料研究を行っていくことで、次世代の平和博物館を担う若手研究者・学芸員を世界の平和博物館で活躍する人材として育成していきます。

3 「平和研究センター(仮)」内の研究プログラム

本センター設置後の研究計画では、(1)「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」、(2)「3.11後の平和博物館の展示内容の改善と国際ネットワークの構築の研究」、(3)「人権問題の共同研究と国際ネットワークの形成」(4)「CATASTROPHE, JUSTICE AND PEACE」の4つのプログラムに重点的に取り組む予定です。

たとえば「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」では、兼清順子国際平和ミュージアム学芸員を中心に、戦争経験者が減少していく現代において、戦争を知らない世代に戦争経験を伝えるための効果的な博物館展示技法の研究を行っていきます。先日、国際平和ミュージアムで講演を行われたエリック・ソームルズ博士(オランダ戦争・ホロコースト・大虐殺研究所研究員)も、戦争体験者が減少する中で、博物館での展示技法の革新によって、戦争を知らない来館者に強い印象を体験させ、戦争体験を理解するための文化的記憶の仕組みを作り出す必要を語っておられました。国際平和ミュージアムにおいても、未来の展示技法の開発に向けて、博物館学、歴史、映像技法、人類学、哲学の研究者が共同して、新しい平和博物館の展示技法を開発していく研究をスタートさせます。

また、山根和代前副館長(現立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員)を中心とした「3.11後の平和博物館の展示内容の改善と国際ネットワークの構築の研究」では、世界の平和博物館とのネットワーク構築を行いながら、先ほどのソームルズ博士のように国際的な研究者との連携を強めることによって、国際平和ミュージアムの展示をより国際色豊かなものにしていくための基盤を作っていきます。

他のプログラムも、「平和と民主主義」の理念に基づく平和研究をネットワーク作りの基礎におく、博物館と国際連携教育を結びつける研究を計画しています。「人権問題の共同研究と国際ネットワークの形成」では出口雅久法学部教授を代表として、欧州とアジアにおける人権問題と紛争解決についての国際的なシンポジウムやゼミナールを企画し、本学での平和研究と平和教育に立命館大学教学の面からも貢献します。

また「CATASTROPHE, JUSTICE AND PEACE」ではモンテ・カセム館長(立命館大学政策科学部特命教授・理事補佐)を代表として、日英各6大学大学院ネットワーク「RENKEI」プロジェクトとして、大学院レベルでの国際的な平和研究を行い、国際平和ミュージアムを平和教育発信の場にしていくことを目指しています。

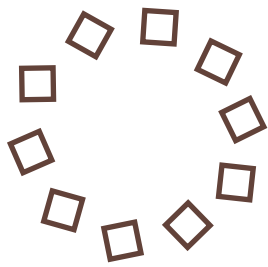


「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」第1回ワークショップ

国際平和ミュージアムは「大学立」の平和博物館であり、そこに他の平和博物館にない特色があります。大学とは研究と教育を行う場所であり、そこではその自由と客観性をなにととも一国家であれ、権力者であれ一侵すことは許されません。

国際平和ミュージアムに「平和研究センター(仮)」が設置されるということは、京都市民の戦争の記憶を保存する運動を母体とし、戦争の加害と被害の歴史を誠実に見つめ、国際的な平和構築のために行動する人間を育成することをめざして活動をしてきたこのミュージアムに、大学の存在理由である「研究」という生命を与えることにほかなりません。日本中の、そして世界中の平和研究者が集い、いかなる政治的権力にも脅かされずに平和のための研究を行い、継続していける場所を私たちはここに築くのです。

まだこれからのスタートですが、ぜひ多くの平和研究者・平和博物館研究者にご協力いただき、立命館大学国際平和ミュージアムが日本における平和研究と平和博物館の中軸となるように活動していきたいと思っております。どうぞご協力をよろしくお願いいたします。



レコードプレーヤーで当時の歌曲を聴く

「メディア資料研究会」、始動

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長 田中 聡
(立命館大学文学部教授)

立命館大学国際平和ミュージアムには、2016年3月末の時点で4万点に及ぶ貴重な資料が所蔵されています。4月から、それらの詳細な資料データが検索できる新検索システム **Peace Archives** が使えるようになりました。また、従来からミニ企画展示の一環として「この1てん」や「熟覧！」など、所蔵資料を活かしたユニークな展示が行われており、これらを通じて当館のもつ資料の価値が広く知られつつあります。

平和ミュージアム内のメディア資料室では、所蔵資料の閲覧や複写が可能であり、ここにしか無い資料を求めて研究者・学生や一般の入館者が毎日訪れます。中には所蔵資料を用いた研究論文を書かれた方も多数ありますが、ミュージアム内での資料調査・研究活動との連動面が弱く、残念ながらそうした研究成果がこれまで十分に共有・蓄積出来ていたとは言いがたい状態にあります。

そこで今年から、当館の所蔵資料の価値を再認識し、研究活動をさらに活性化するため、メディア資料セクター主催の「メディア資料研究会」を立ち上げることとなりました。



会場の様子

た。ミュージアムに所蔵されている多種多様な資料の現物を実際に手に取り、閲覧しつつ、その資料を用いた研究をされている専門家の報告を聞き、資料について深く検討することを目的とした研究会です。

第1回は5月20日(金)夕刻からメディア資料室にて開かれ、本学教員・大学院生・学生・当館職員など15名が参加しました。報告者は本学文学部非常勤講師の丸山彩氏・同大学院生(学振DC)の織田康孝氏で、「アジア・太平洋戦争期のジャワにおける歌曲懸賞－《八重汐》の成立に着目して－」と題し、日本軍統治下のインドネシア・ジャワ島で、大東亜共栄圏の発展や統治を讃える自作歌曲の一般公募が行われ、在住日本人の作った「八重汐」(やえしお)が選ばれて、公式な場で広く利用されていく過程が紹介されました。ジャワでの事例研究はまだ少なく、丸山・織田両氏が進められている一連の研究は先端的なものといえます。

「八重汐」は現地で刊行されていた日刊紙『ジャワ・バル Djawa Baroe』(表紙の写真参照)に日本語・インドネシア語併記で掲載されており、出席者は復刻された『ジャワ・バル』や『ジャワ新聞』、『Asia Raya』等のページをめくり、懸賞の記事や当選作品の楽譜を確認しました。軍人である佐々木隆が作詞した歌詞の一番は以下の通りです。

八重汐の遠つわだつみ / ひんがしの神の国より /
大きことかしこみまつり / みいくさの船をすゝめて /
はらからとこゝに集へり。

このうち第2行の「ひんがし」は選者によって「天照す」と改められ、厳かなメロディを付けて、啓民文化指導所の指導の下、原住民の児童を集めたコンクールが行われたとの資料が紹介されました。

また当時広く聴かれていた「国民歌謡」の『隣組』・『椰子の実』、現行の「君が代」の作曲者が作った『婦人従軍歌』といった歌曲を当時の音源で実際に聴きつつ、日本軍によ

るメディアを活用した宣撫工作の特徴や、オランダの植民地となっていたジャワでのジャズなど西洋音楽の定着との関係について、活発な議論を交わしました。

実際に資料に触れ、手触りや匂いを確かめ、当時の音声を聞きながら考えるというのは、研究者が普段行っている活動ですが、この研究会では専門分野が異なるメンバーと一緒にそれを追体験し、多様な観点からの検討を行うことで、資料の価値が再認識されます。今回の議論では、日本軍の占領地と植民地での日本語教育の浸透の仕方に差があり、それが日本語の歌の広がりに影響したこと、ジャワで受け入れられていた「洋楽」が排除され、代わりにガムランなどの民族音楽への回帰が求められたことと、日本の楽曲導入とがどう関連するのかといった、文化史的に興味深い問題が提起されました。こうした議論の積み重ねは歴史学・文化人類学・社会学といった学問分野の協業の可能性を開き、当館内に設置を予定している「平和研究センター」の活動へとつながっていくでしょう。

また、関連資料の収集について報告者から、ジャワ現地に残る未整理資料、日本国内の個人（戦友会・新聞記者等）のもとにある資料などの調査、日本の占領期に実際にこうした歌を聴き、歌った記憶のある住民の聞き取りなどが急務であるとの発言もありました。現在、ミュージアムでは常設展示の12年ぶりのリニューアルの準備を進めつつあ



報告する織田康孝氏（左）、丸山彩氏（右）

り、今後の発展を見すえたコレクションポリシーの再考、新たな資料調査・収集計画の策定が必須となっています。所蔵資料を用いた最新の研究は、そうした見通しを立てる上でも示唆的です。

第2回例会は7月30日、昨年5月に寄贈されたBC級戦犯の貴重な資料を多数含む「大槻隆資料」が対象です。資料の発見と当館所蔵に至る経緯、占領期の研究にどのような新たな知見を加えるか等、同資料の発見者で目録を作られた白木正俊氏が報告されます。

今後とも、平和資料研究の新たな可能性を開く「メディア資料研究会」の活動に、どうぞご期待下さい。

新収蔵資料データベース検索システム Peace Archives 公開

2016年度4月より、国際平和ミュージアムの収蔵資料を検索する為の新システムとしてPeace Archivesが公開されました。これまでミュージアムのホームページ上で同名称の検索システムが公開されていましたが、検索方法、公開内容を一新した検索システムとしてご利用いただけます。

ミュージアムには約4万2千点の所蔵資料がありますが、従来のシステムでの公開は約2万点とその半分に過ぎず、検索方法もフリーワード検索ができないなど利便性が良いものではありませんでした。このうち新システムでは3万7千点が公開され、フリーワード検索や、年代、作成者や資料概要からも検索することが可能です。新規受入資料も順次公開していきます。

以下、新システムの特徴についてご紹介します。

1. 各資料に登録されたキーワードでの検索が可能

検索システムを前にして、どういった単語で検索すればよいかわからないことがないように、各資料には「軍隊・兵士」「銃後・国家総動員」といったキーワードを登録し、

関心のある分野についてキーワードでの検索が可能です。

2. 資料群での検索が可能

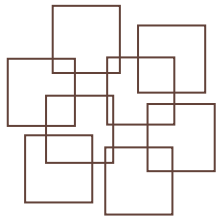
各資料はそれぞれ1件のデータとして登録されていますが、出所を同じくする資料群として調査研究する場合にも便利のように、資料群名称や資料群番号も登録されています。これにより、例えば戦時中、中国で日本人捕虜を組織して反戦活動をした鹿地^{かしひたる}巨関係資料の抽出といった検索が可能です。

3. 資料画像の充実化

従来のシステムより公開されている画像数が大幅に増えました。まだ公開されている画像は約7千点ですが、今後順次公開数を増やしていきます。また検索においては画像がある資料のみの検索も可能です。（※ただし画像の無断転載はご遠慮ください）

〈Peace Archives へのアクセス方法〉

ミュージアムホームページ **Peace Archives** よりアクセス
<http://peacedb.ritsumei.ac.jp/archives/>



独立記念館との交流から東アジア相互理解への道を考える

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 勝村 誠
(立命館大学政策科学部教授)

正課授業で独立記念館を訪問

立命館大学は「平和と民主主義」を教学理念に掲げ、それに対応して体験型平和学習科目「国際平和交流セミナー」を開講しています。この科目には「ヒロシマ・ナガサキ」、「中国」、「韓国」の3つのプログラムがあり、私も過去3回「韓国プログラム」を担当しました。「韓国プログラム」はシラバスで「フィールドワークや韓国大学生との交流・討論、韓国文化体験などを通して、国際社会の平和と人権をいかに築き守るのか学生自身で思考、行動できるグローバルな視野の獲得を目指します」と科目のコンセプトを明記しています。

このプログラムでは2011年度から韓国の京畿道天安市郊外にある独立記念館という博物館を訪問し、展示の見学と研究員の方々との討論会を行っています。今年度(2016年度)からは政策科学部2年生正課授業「日韓相互理解プロジェクト」も同館を訪問する予定です。

独立記念館は尹柱卿館長が「韓民族の精神を守り大韓民国の自負心を伝えております」と語るように、韓国の民族ナショナリズムの聖地のような存在です。「日本帝国主義によって国が奪われる未曾有の苦痛」に抵抗した「民族精神と熾烈な愛国心によって独立運動を展開」した歴史が描かれています。また、館長は「世界人類の平和のために力を尽くしたい」¹とも述べています。

手元にある旅行ガイドを見ると「独立記念館で、韓国の人々の思いと歴史を学ぶ」という見出しとともに「7つの展示館があり、そのうち4つまでが日本の侵略とそれに対する抵抗の歴史を扱っている。…居心地の悪さを感じる人



(写真1) 独立記念館の施設配置図

もいるかもしれないが、韓国の人々が戦前の日本による行為をどう受け止めていたか、その一端に触れることができる」²と紹介されています。私も初めて独立記念館を訪れたとき「居心地の悪さ」を感じたものです。でも、日韓の深い相互理解のためには、韓国のナショナリズムに向き合うことが大切だと私は思います。なぜ、このような博物館が必要だったのか、韓国の若い世代はどう見ているのか、私たちはどう受け止めればいいのかを考えるよい機会になると思うのです。

独立記念館の概要

独立記念館は1987年8月15日の「光復節」(韓国では解放を祝う国民の祝日)に開館されました。写真1は独立記念館の公式サイトに掲載されている施設配置図ですが、総面積は120万坪と驚くべき広さです。見学者は展示を見る前に、まず祈りを捧げる両手を象徴化した「キョレの塔」^⑨という巨大なオブジェを通り抜け、次に「キョレの家」^⑭に収められた「不屈の韓国人像」に出会います。ちなみに、キョレ(거례)とは韓民族を指す韓国語の固有語です。この巨大な像は韓民族の独立精神を象徴化した彫刻とされています。こうして居ずまいを正して厳粛な気持ちで展示を見るという装置になっています。①～⑦の各展示館の展示テーマは、番号順に「民族のルーツ」「民族の試練」「国を守る」「三・一運動」「国を取り戻す」「新しい国づくり」「独立運動体験場」となっています。

独立記念館建設までの経過³

韓国において民族独立運動を記念する博物館建設の動きは、1946年2月の「乙未独立宣言記念全国大会準備委員会」による決議に溯りますが、本格的に計画が動き出したのは1974年の「民族博物館設立計画案」でした。朴正熙大統領が「維新体制」反対勢力の弾圧を本格化していた頃です。1978年に設立計画が完成したものの、1979年秋の朴正熙暗殺やその後の混乱のなかで、この計画は棚上げとなりました。

独立記念館の建設が具体化したのは全斗煥大統領時代の1982年です。この年の6月26日に、日本の高校歴史教科書に対する文部省（当時）の検定で「中国・華北への侵略」という記述に対して「進出」と表記を変更するよう求められたと報道され、これに中国と韓国から厳しい抗議がありました。いわゆる「第一次教科書問題」⁴です。日本政府は抗議を受け止め、教科書検定基準に「近隣のアジア諸国との間の近現代の歴史的事象の扱いに国際理解と国際協調の見地から必要な配慮がされていること」との規定が加えられました（近隣諸国条項⁵）。また、これを契機に韓国側では正しい歴史認識のための民族博物館の必要性が再び叫ばれるようになり、8月28日に「独立記念館建立推進委員会」が発足、その3日後の8月31日には「誠金募金運動」が進められ、年末までに約350億ウォンが集まったとされています。この「誠金」=寄付を基金として独立記念館の建設が始まりました。

こうして見てみると、独立記念館建設計画は、全斗煥政権が朴正熙政権の文化政策を引き継ぎながら、教科書問題を契機とする国民の「反日」的感情に便乗して、自らの政権の正統化に利用しようとしたものだったと言えます。ところが、独立記念館は当初の開館予定日（1986年8月15日）の直前（8月4日）に「キョレの家」が火災で焼失し、開館が延期になりました。歴史は皮肉なもので、翌1987年になると全斗煥軍事独裁政権に対する批判の聲が高まり、全国的に大規模に展開された「6月民主抗争」⇒全斗煥大統領による「6・29」民主化宣言⇒「7月・8月労働者大闘争」へと、まさに民主化運動が最高潮を迎える時期に独立記念館が開館するに至りました。

独立記念館との交流の方向性

以上より、現在の独立記念館が「独立精神」と「人類の平和」を二つながらに強調している意味も理解できると思



(写真2) 旧「朝鮮総督府」建築物の部材を活用したオブジェを見学する学生たち

います。民族博物館の建設は解放以来の宿願であり「独立精神」の称揚は引き続き重要なのですが、民主化以後には「人類の平和」という普遍的な正統性も不可欠になったのでしょう。また、朴正熙・全斗煥時代の経過を踏まえると、日本で一部のネット右翼の書き込みに見られるように、右派勢力が独立記念館に対して「反日施設」だとレッテル貼りをすることにも（正しいという意味ではなく）「一抹の理」はあるでしょう。

私たちにとって重要なのは、現代韓国、ひいては東アジアにおける「抗日」と「反日」をきちんと見分けることだと思います。東アジアの近代史を真摯に振り返るならば、日本の対外膨張路線により東アジア全域を植民地支配や軍事侵略=戦争に巻き込んだという事実は否定のしようがありません。独立記念館にもそれにまつわる展示が豊富です。重要なのは、日本社会がそのような事実を事実として認定することだと思います。私たちが展示に案内して下さる学芸員の方も「決して反日のための展示ではありません。事実を事実として知ってください」と語りますし、私たちの交流のパートナーである研究員の尹素英さん、李明花さんも、学生たちの率直な感想を受け止めリベラルな姿勢で討論に参加されます。（写真2）

日本の支配と侵略を受けた国の側が、独立を守るために日本に抵抗したこと、その「抗日」精神を、自らの正統性の柱とするのは当然のことでしょう。そのような「抗日」がイコール「反日」ではないことを理解したうえで、日本社会の側が東アジア各地の「抗日」を寛容に受け止めることと同時に、朝鮮半島がいまだに分断されている現在、南北それぞれの側でナショナリズムがなぜ強調されるのかにも思いを馳せることが大切だと思います。そのような思索をくぐり抜けて、東アジアの相互理解と平和構築への道を探っていくことが重要だと私は考えています。これを読まれた方も機会があればぜひ独立記念館を訪ねてみていただければと思います。

1. 尹柱卿「ごあいさつ」、独立記念館の日本語版サイトより。
https://www.i815.or.kr/html/jp/introduction/introduction_01.html
2. ブルーガイド海外版編集部『ブルーガイドわがまま歩き5 韓国』実業之日本社、2013年1月、304頁。
3. 設立経過については、牧野波「韓国の戦争記念館・独立記念館がまなざす『国民』とは」『言語・地域文化研究』（東京外国語大学大学院）17号、217-218頁を参照した。
4. 私は大学卒業直後に公立学校に勤務していたころ、この問題に直面した。そのとき、自分が余りにも日本近代史に無知であることに衝撃を受け、それが大学院で日本政治史を研究しようと決断する契機となった。私にとって教科書問題は人生の転機であった。
5. 現在、右派勢力はこの条項の見直しや撤廃を目指している。

『ナナムの家のハルモニたち 元日本軍慰安婦の日々の生活』

慧眞著

徐勝 / 金京子訳

(人文書院)

1998年3月刊



「慰安婦」ハルモニ一人一人に出会える本

戦時中、日本軍が駐屯したり進撃した東アジア・東南アジアのほぼ全域に作られた「慰安所」。韓国には、その「慰安所」で日本軍兵士の性的慰安をさせられた元日本軍「慰安婦」の被害者女性たちが、共同生活を送る施設があります。それが「ナナム（分かち合い）の家」です。そうした被害女性たちを、韓国では親しみを込めて「慰安婦ハルモニ（おばあさん）」と呼んでいて、いまではこの呼び方は日本でもよく知られています。

本書は、この「ナナムの家」が出来てから最初の数年間をハルモニたちと過ごした慧眞（ヘジン）氏が、ハルモニたちの日常生活をユーモア一杯に綴った記録です。慧眞氏は、韓国でも戒律が最もきびしいと言われる曹溪宗の僧侶で、当時30代の若さで「ナナムの家」の設立と運営に奔走しました。

「ナナムの家」には、入れ替わりながらも常時、数人～十数人のハルモニが住んできました。戦後、家父長的な貞操観念が根強かった韓国で、強姦や「慰安婦」生活の記憶に心身をさいなまされ、被害を自分の中に抱え込み大きな傷を負ったまま、生活するために女一人で苦労してきたハルモニが大勢います。そんな中でも70歳、80歳を過ぎて、一人暮らしが大変になったハルモニたちが、「ナナムの家」での生活を選んで入居しました。同じ「慰安婦」被害者でも、当然のことながら、異なる人生を歩んできたハルモニたちは、一人一人性格も嗜好も全く違います。そんな個性豊かなハルモニたちが一緒に生活するので、ケンカは日常茶飯事。共通するのは、ハルモニたちがこれまで辛酸をなめ尽くしてきた、ということだけです。

筆舌に尽くしきれないほどの過酷な経験をしたハルモニ

二たちのような被害者たちのことを、「ユーモア」の対象にするなんて・・・と思われるかもしれませんが、しかし、実際のハルモニたちは、「慰安婦」運動の闘士でも、聖人君子でもありません。贈り物の分配に不満を持ち、お金がないと慧眞氏に文句を言い、自分だけ得しようと頭を使ったり、他のハルモニに意地悪したりする一面もあります。辛酸をなめてきたからこそ、簡単に人が信じられず、他人を受け入れる余裕もなかったかもしれません。ところが、そんなハルモニたちのエピソードも、慧眞氏の筆により、クスリと笑わされるようなエピソードに変身します。そこには、なんとも愛すべき飾らない等身大のハルモニが、私たちの前に現れるのです。一方で慧眞氏は、自分の生活で手一杯だったハルモニたちが、共同生活や様々な人々の支援と励ましを通じて外に目を向けはじめ、やがては国を越えてつながっていくようになる「成長」の姿も、丁寧に描いています。

また本書が秀逸なのは、当時「ナナムの家」に住んでいたハルモニ一人一人の個性と人柄が見事に描きだされている、という点です。本書の中でハルモニたちは、「慰安婦」被害者の一人としてでなく、金順徳という、李玉今という、朴頭理という個性として描かれています。実はこの本が韓国で最初に出たのは1996年で、すでに20年前になります。登場する10名以上のハルモニのほとんどが、今ではすでに亡くなっています。ですが私たちは、この本を読めば、ハルモニ一人一人にもう一度出会うことができるのです。

「慰安所」も「慰安婦」も、日本によって制度的に作り出されました。だから私たちは、この「制度」の被害者も、元「慰安婦」という抽象的な一つの範疇にまとめて見てしまいがちです。ですが、その被害者たちは皆、それぞれの人生を歩んだ一人の人間で、そうした一つ一つの尊い人生があったことを知ることが、問題の本質を理解する第一歩だと思います。そのことは個別の個性に触れない限り、なかなか実感できないでしょう。被害者たちのほとんどが亡くなっていつの間にか今だからこそ、「慰安婦」問題を知らないこれからの世代に伝えるために、「概説書」ではない本書が、より重要になってくると思います。「慰安婦」問題に関する書籍はたくさんありますが、20年前に出た本書が、私にとっては今でも「慰安婦」本の中で推薦したいNO.1です。

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 庵途由香（立命館大学文学部教授）

国際ワークショップ開催

2016年6月11日(土)、オランダの戦争・ホロコースト・大虐殺研究所よりエリック・ソームズ博士を迎え、小川さやか氏(先端総合学術研究科准教授)のコーディネーターにより国際ワークショップを開催しました。

ソームズ博士の基調講演は、“The Power of photographs. The role of photos in Memorial Museums”(写真の力。記念博物館における写真の役割)と題して、過去を想起するための記憶装置としての写真の力と、博物館においてこれがどのような役割を果たすのか、ソームズ博士が製作に関わった複数の館の常設展示や展覧会など具体的事例を交えて論じるものでした。ここでの記念博物館とは「道徳的基準について示し、過去に意味を与え、出来事を記念する機能」を持つ場の中で、平和博物館もこの中に含まれます。ソームズ博士は、アライダ・アスマンの記憶論にもとづき、こうした館の展示は、その集会的記憶の担い手と結びつき、過去、現在、未来を橋渡しするものであるとした上で写真は記憶に形を与えて過去を体現化するものであり、それゆえに、写真と実物資料と個人のエピソードが結びつくことで大きな力を持ちうるとして、ご自身が携わったアンネ・フランクに関する展示を紹介されました。様々な表情を見せるアンネ・フランクのポートレートは、彼女の残した日記と結び付けられ、見る人に強い共感を呼び起こすものであり、博物館における写真の力を示す成功例でした。

しかし、過去の想起方法は変化し続けるものであり、現在、博物館の世界で人気を呼んでいるのは最新式の映像やセットを用いた「演出された臨場感」の体験です。ソームズ博士はこれに対しては批判的な見解も示しながら、しかし、真に問われているのはデリケートな課題を含む過去へのアプローチ方法として何が適切であるのか、記念博物館において過去を記憶する方法を模索することであると問いかけました。

続く報告は、そうした課題への応答として、竹中悠美氏(Yumi Kim Takenaka)(先端総合学術研究科准教授)からは、「死者へのまなざし—写真論における倫理と民俗学・宗教学における弔いの問題—」(Regarding the Dead: Ethics in Photography Studies and Mourning in Folklore)と題して、死が展示に供されることの倫理的課題、高誠晩氏(Sungman Koh)(衣笠総合研究機構専



エリック・ソームズ博士

門研究員)からは「移行期正義とメモリアル—済州4・3平和公園の事例から」(Transitional Justice and Memorials: Case Studies of Jeju 4.3 Peace Park)と題して、4・3事件を事例に、公的記憶の変化により変遷する死者の位置付けについて、原佑介氏(Yusuke Hara)(衣笠総合研究機構専門研究員)からは「一人一人の死を数える—日本人作家が描いた朝鮮人虐殺を通して」(Counting Every Death: Japanese Literature and the Massacre of Koreans)と題して、大量虐殺の前にあって一人ひとりの人間の死としてそれを受け止めることの文学的挑戦について、田中壮泰氏(Moriyasu Tanaka)(学術振興会特別研究員・東京大学)からは、『『アンネの日記』の日本での受容をめぐる』(Reception of The Diary of Anne Frank in Japan)と題して、日本におけるアンネ・フランクの受容を事例に受け手となる社会の側が変化することで人々がアンネに対して抱くイメージが変わってきたことについて報告がなされました。

その後、総合討論では、西成彦氏(先端総合学術研究科教授)の司会のもと、エリック・ソームズ博士と報告者の応答があり、記憶の継承においては集団ではなく一人ひとりの人間の死と生として記憶されていくことの大切さについて改めて議論がなされました。



ワークショップの報告者たち

「WILL : 意志、遺言、そして未来—報道写真家・福島菊次郎」

会 期 : 2016 年 4 月 23 日 (土) ~5 月 29 日 (日)

会 場 : 立命館大学国際平和ミュージアム 1 階 中野記念ホール

参観者 : 4,411 名

主 催 : 立命館大学国際平和ミュージアム / 共同企画 : KYOTOGRAPHIE 実行委員会 / 後援 : 京都府、京都府教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

報道写真家・福島菊次郎は戦後の広島取材中、原爆症に苦しむ家族に出会い、その姿を 10 年にわたり撮り続けました。この作品をきっかけとして報道写真の世界へ入り、三里塚闘争、ベトナム反戦市民運動、全共闘運動、自衛隊と兵器産業、公害問題など多岐にわたるテーマで激動する戦後の日本を写真に収めてきました。晩年は、写真で表現できなかったことを補完しようと講演や執筆活動にも積極的に取り組み、2015 年 9 月に急逝するまで、権力に迎合しないことを信念に精力的な活動を続けてきました。

本展では、福島氏自身が制作し多くの市民団体などに貸出を行ってきた写真パネル*約 400 点の中から、原爆症に苦しむ家族の姿を写した「ピカドン」、戦争の犠牲となった人々をテーマにした「捨てられた日本人」、防衛庁（当時）での内部取材をまとめた「自衛隊と兵器産業」、経済発展の裏で発生していた公害問題を取り上げた「自然と人間破壊の構造」の 4 テーマを紹介しました。

また、本展は KYOTOGRAPHIE 共同企画であり、堀川御池ギャラリー会場（KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2016 オフィシャルプログラム）をあわせてご覧いただくことで、福島氏の作品世界をより深く知ることができる構

成となりました。

福島氏が扱ったテーマはいずれも戦後史を批判的に考察するために重要なものであり、日本社会が今も引き続き抱えている問題でもあります。福島氏が遺した写真パネルを通して、戦後の日本が歩んだ道、残してきた課題について考えるきっかけになることを願い、本展を開催しました。

*現在は、管理を福島菊次郎写真パネル保存会、保管を恵泉女学園大学、著作権を共同通信イメージズで行っています。



展示会場の様子

見学者の感想 (アンケートより)

- 福島氏自作のパネル展示を観ることができ、大変うれしく思いました。亡くなられてもなお、命をかけてこられた数々のメッセージとその生き様が伝わってきました。
(20代 大学生 京都府)
- 「ピカドン」では、一人の男性とその家族を追い記録することで、「まぎれもなくそのような人がそんざいしたということ」「このような方々が沢山いらっしやる」ということを浮き彫りにしてくださったと思います。男性の苦痛にも見える顔の表情、彼の葬式への参列を断られた福島菊次郎氏のむなしさが心に深く残っています。他にも多くの作品が、感情へ訴えかけて来ましたし、当時の広島、山口等を追体験させて頂きました。他作品も拝見したいです。
(20代 本学学生 京都府)
- 堀川御池ギャラリーの展示を見てから来たので、より深く展示意図を理解できた。ぐるりとめぐることができる展示構成は、とてもよく理解でき、論理的な構成だと思った。戦後の日本人は、いつもあざむかれ、負け続けているのだろうかという気持ちになった。対抗勢力やカウンター的なものの成長もあわせて、彼の写真を見ていきたいと思った。展示を見たあとの虚無感や救いの無さを大事にしなければならなかった。
(30代 会社員 京都府)
- ものすごかった。物量的にすぎて、一枚一枚理解するのに時間がかかった。解説文が大変助けになりました。福島さんを映画で知って、3~4年前大阪の展示を見ました。再び写真が見れて、福島さんの仕事と、その奥の見えない人柄を感じました。自分への反省も考えさせられた写真群でした。ありがとうございました。
(40代 芸術家 兵庫県)

ギャラリートーク

日時：2016年4月23日（土）11:00～11:30
会場：特別展会場内
講師：那須圭子氏（フォトジャーナリスト）
参加者：31名

福島氏と26年間活動をともにしたフォトジャーナリスト那須圭子氏に福島氏とのさまざまなエピソードを、展示テーマにあわせてお話いただきました。「ピカドン」では、アマチュアの写真家だった福島氏がプロになるきっかけとなったことや原爆症に苦しむ中村杉松さんの姿を見て最初の2年間は写真を撮ることができなかったこと、「捨てられた日本人」では、福島氏がこれまで何度も助けてもらった在日朝鮮人の問題に関心があったこと、「自衛隊と兵器産業」では、どのように防衛庁（当時）の監視の目をくぐり撮影したのかについて、そして、「自然と人間破壊の構造」では、網元の家に生まれた福島氏が海に思い入れがあったことや、いまだ解決されていない水俣病の問題のことなどをお話いただきました。

最後に、亡くなる10日前、病床の福島氏から受け取った「戦争なんか始まらないとみんな頭のどこかで思っ



那須圭子氏

ているだろう。でも、始まるよ。」というメッセージを参加者に提示し、福島氏が写真を撮り伝えてきたことはどれも未だ解決されていない問題を多く含み、私たちはそれらに向き合い、これからも考えていく必要があるということを確認されていました。

— 参加者の感想 —

- 一つ一つの写真が福島さんからのメッセージだと思いました。戦後70年の今、日本にどんなことがあったのかを考えることは大事です。（50代 主婦 京都府）
- 戦争は始まるよ。この言葉の意味を深さと重みを感じました。私もいつかこういう日が来るだろうと思います。そのために今何をすべきか、子供たちに何を伝えるべきか、親として考えさせられます。戦争は阻止しないと、けれど今の世の中平和すぎます。（50代 介護士 京都市）

映画上映会 & 監督トーク

「ニッポンの嘘 報道写真家・福島菊次郎 90歳」
（長谷川三郎監督 2012年公開）

日時：2016年5月14日（土）13:00～15:30
会場：アンスティチュ・フランセ関西—京都 稲畑ホール
司会：田中聡（立命館大学国際平和ミュージアム副館長、立命館大学文学部教授）
講師：長谷川三郎監督、川村健一郎（立命館大学映像学部教授）
参加者：81名

映画の上映会に合わせて、長谷川三郎監督、川村健一郎教授によるトークセッションを開催しました。

福島氏と長谷川監督が初めて出会った頃のことからトークは始まりました。部屋の合鍵を渡された時、長谷川監督は、信頼を得られたと思うと同時に「お前はどんなものが撮れるのか」と人を撮ることへの覚悟を求められている気がしたと当時を振り返りました。1年間にわたる撮影は、過去に出版された写真集の写真1点、1点について話を聞く形で作業が進められたそうです。

そして、2011年3月の福島第一原子力発電所事故後、広島と福島が重なると憤りを感じている福島氏を見て、



川村健一郎教授(左)、長谷川三郎監督(右)

これまで福島氏が伝えてきた「ニッポンの嘘」が過去のものではなく現実の問題として長谷川監督の中で意識され、映画の構成を大きく変更することになったという制作側のお話を聞くことも出来ました。その他、撮影にまつわる数々のこと、ドキュメンタリーを撮影する姿勢など多くのことをお話いただきました。

— 参加者の感想 —

- 福島さんを存じ上げておりませんでした。若い20代の私にとっては大変「生」という力の強さを考える内容でした。（20代 会社員）
- ドキュメント映画の傑作のひとつに数えられる作品に感動しました。生涯を一筋の道で貫きつづ、人間としての魅力と気品を存分に発揮した稀有な方でした。監督のお人柄と才能があればこそその作品と感じました。ありがとうございました。（80代 宇治市）

第 98 回

「京都の戦後開拓」

会期：2016年2月6日（土）～3月27日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

1945年に終結した戦争の影響は、国内外、多方面におよびました。政府は、敗戦で混乱した国内への復員・引揚者約660万人が帰還することによる人口問題と失業対策として5年で100万戸の帰農を目指す「緊急開拓事業実施要領」を採択しました。これにより戦時中に国策で海外へ渡った人々の多くが開拓地へ移住することとなりましたが、農業条件、生活条件の不利な場所が多く、入植後も困難を強いられました。

ミュージアムから北へ約2.5kmほどの原谷（京都市北区大北山原谷乾町周辺）も戦後開拓により開かれた地域です。1948年10月、満州開拓からの引揚者をリーダーに10人が入植し、電気や水道、道路が未整備の中、自力で住居を建設しながら開墾を始めました。当初は土壌が酸性で植えた麦やジャガイモが実らず、家畜の糞尿を堆肥とした土壌の改良が行われました。

開拓地では日の出とともに起き、家畜の世話、農作物や牛乳の出荷の後に道路工事など日雇仕事で働き、その合間に開墾する生活が続ききました。道路や灌漑が整備され、酪農、養鶏、野菜による営農が確立するまで何年もかかりました。

展示では、満蒙開拓青少年義勇軍募集のポスター、戦後開拓に使われた鍬や竹かごなどの農具をはじめ、原谷地域の映像や写真などを展示し、京都・原谷の戦後開拓を紹介しました。

本展開催にあたり、最初の入植者のご子息で自身も中学生の頃から開拓作業を手伝っていた前原英彦氏（原谷在住）には、貴重な資料と写真のご提供、また長時間にわたるインタビューにご協力いただきました。



展示会場で説明する前原英彦氏

第 99 回

「熟覧—メディア資料室への誘い—」

会期：2016年4月1日（金）～4月22日（金）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

国際平和メディア資料室は、2005年に開設した平和について調べる図書資料室です。ミュージアム開館日に準じて開室し、どなたでも無料で利用いただくことができます。児童から研究者まで幅広い方々が来室されています。

メディア資料室は、ミュージアムの展示の理解を深めるための図書やAV資料をはじめ専門書や学術雑誌など約4万6千点を所蔵しています。



展示会場の様子

本展は、これらの資料の魅力やその利用実績を紹介し、メディア資料室の活性化につながるよう企画しました。図書資料はメディア資料室の学生スタッフによる紹介を交えて、利用実績は実物資料とそれを参照した研究書や子供向けの図書などを合わせて紹介しました。

第 100 回

「満州報国農場とは何だったのか

—東京農大湖北農場を中心に—

会期：2016年4月29日（金・祝）～5月29日（日）

主催：東京農業大学国際農業開発学科教員有志

（代表者：小塩海平）

共催：自由と平和のための京大有志の会
立命館大学国際平和ミュージアム



展示会場で説明をする村尾孝氏

報国農場は、1943年に閣議決定された「食糧増産応急対策要綱」に基づき、主に自治体や農業団体などが経営する農場です。当時、満州には数十箇所の報国農場が存在し、

日本から多くの方が派遣されました。

東京農業大学報国農場（湖北農場）は、東京農大の「外地農場」で1944年に設立され、満州で唯一の大学経営による報国農場でした。

開拓は農業拓殖科の教育課程に含まれ、1945年に入学した8期生87名全員が参加しました。夏は湿地、冬は凍土となる悪条件の土地を寒さや慣れない生活に耐え開墾しました。敗戦を迎えると、ソ連軍からの逃避、収容所生活など、日本へ引揚げるまで数々の困難に遭い、敗戦前後の混乱の中で87名のうち53名の学生が犠牲になりました。

本展は、東京農大に保管されている文書資料や写真資料を使った解説パネル、ミュージアム所蔵や個人蔵の実物資料を展示し、徴兵や志願によって戦地へ向かったのではなく、大学の教育課程の中で犠牲になった学生がいることを知らせる機会となりました。

なお、本展は東京農大で昨年開催された同内容の展示に農業拓殖科8期生として報国農場での開拓を経験し、現在はミュージアムでボランティアガイドをしている村尾孝氏の協力がきっかけとなりました。



平和を考える授業からガイドへ

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 鳥羽 洋子

ガイドを始めて五年目になります。きっかけは2008年に私が勤務していた大阪の府立高校で、一学年240名の平和ミュージアム見学を企画したことでした。ガイドの方たちの説明を熱心に聞き入っている生徒の様子を見て、私も退職後、是非ガイドをしてみたいと思うようになりました。

私は「普通科総合選択制」の高校で十年間、「ワールドスタディーズ」という学校特設科目を担当していました。年間通して「戦争と平和」を柱にした授業を組み、2003年以降の「イラク戦争」では、劣化ウラン弾や自衛隊派遣の問題などをリアルタイムで取り上げて調べ学習もしました。また、被爆者である母の証言や元海兵隊員アレン・ネルソンさんのベトナム戦争体験を通して「戦争の真実と平和」について考えました。こうして生徒と共に私自身も勉強し問題を深めてきたことが、今、ガイドに役立っています。

2012年に、このコース選択生徒のミュージアム見学も

実現しました。既に退職していた私は、今度はガイドとして、グループごとの関心あるテーマに即して案内しました。「冷戦後の世界」と二階の展示は、授業や見学テーマの「私たちに何ができるか」とも結びついたようで、熱心に見入っていました。

「過去に日本が危害を加えた国にどんなことができるのか、この世界から戦争をなくすために何をしたらいいのか、何ができるのか、考えて実行できるようになりたい。」

「戦争が終わった所でも地雷が残っていたりして被害を受けている人たちがいることを知り、人権が守られず、戦争に市民を巻き込むことが本当に許せないと思った。」

「戦争が終わらない要因が経済に係るということはどう考えてどう行動していくかが、一番このテーマで大切なことだと思う。」
(見学生徒の感想より抜粋)

これまでガイドをして気づいたことは、見学者の目的や滞在時間、年齢、経験などに応じて、ガイドの仕方を柔軟に変えていかなくてはならないということです。また、展示資料に即した説明を心がけていますが、グループガイドで見学者の集中が途切れそうな時には、対話や自由見学、体験談も取り入れながら次に繋げるようにしています。

今後も、ガイドとして若い世代の人たちに過去の事実や現状をしっかりと伝えていきたいと思います。そして、それが日本の未来について考え自ら判断行動していくきっかけになればと願っています。

2015年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2015年度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。

お名前を記し、感謝の意を表します(敬称略・50音順)。

資料	飯田千鶴子	木田寿二郎	長井 正之	松岡 正樹	文寿 誠二
	宇田喜美子	京都左京健康友の会	中川 和子	水野祐佐子	山本 幸子
	大塚 泰助	須藤のぶ子	中村 隆次	宮下 教雄	由井 秀樹
	奥村 秀雄	高橋 秋水	番匠ますみ	村田登代子	横井 貞弘
	川口 真美	竹内 昭夫	平野 国夫	村山 君江	
図書	新井 勝紘	奥山美由紀	鳥井 眞木	藤原 栄一	山本 宗補
	安斎 育郎	三宮 正一	長井 正之	本庄 豊	団体 91 団体
	家長 福成	杉野 啓明	能登原由美	モンテ・カセム	
	伊藤 昭	田中 聡	福島 朝子	柳田 文男	
	王 玉華	綱島 洋一	藤岡 惇	山根 和代	

※以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

開館日数	来館者数	開館日数	来館者数
4月 25	1,670	10月 27	9,001
5月 27	6,926	11月 24	7,229
6月 25	4,042	12月 21	4,475
7月 27	3,634	1月 23	1,269
8月 26	2,762	2月 23	1,952
9月 20	3,985	3月 27	1,602
合計		295	48,547
累計 (開館当初からの来館者数)			985,168

特別展	5/3～7/4	春季特別展 山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」	9,692	
	9/9～11/4	特別展 世界報道写真展 2015 —WORLD PRESS PHOTO 2015—	9,193	
	9/9～10/4	京都会場：立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール	5,182	
	10/6～10/18	滋賀会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エボックホール	1,466	
	10/21～11/4	大分会場：立命館アジア太平洋大学 A棟 2階コンベンションホール	2,545	
	10/20～12/13	秋季特別展 戦後を語る 70のカタチ	13,945	
特別展示	7/1～8/25	無言館/京都館 - いのちの画室 開設 10周年企画「手島守之輔・伊藤守正 - ふたりの被爆画学生の絵 - 展」	-	
ミニ企画展示	4/2～4/14	第92回 医の倫理 - 過去・現在・未来 - ～日本医学会総会 2015 関西に向けて～	-	
	4/19～5/24	第93回 絶望の島から希望の島へ「クリオン島」 - ハンセン病と差別の中に生きる人々	-	
	6/3～6/24	第94回 日本平和博物館会議 戦後 70 年共同展示	-	
	9/12～9/30	第95回 放射能が降ってくる - ピキニ事件と科学者西脇安	-	
	10/11～12/18	第96回 第9回立命館附属校平和教育実践展示 (守山・小学校・長岡京・宇治・慶祥)	-	
	1/9～1/31	第97回 奥山美由紀写真展「ディア・ジャパニーズ」	-	
	2/6～3/27	第98回 京都の戦後開拓	-	
	講演会ほか		春季特別展 山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」	
		5/3	・講演会「戦後世代の私が、なぜ戦争体験者の証言を伝えたいのか」/ 講師：山本宗補氏 (フォトジャーナリスト)	50
5/3		・ギャラリートーク / 講師：山本宗補氏	45	
5/30		・講演会「加害と被害の重層構造 - 日本人の戦争体験をとらえ直す」/ 林博史氏 (関東学院大学教授)	47	
5/30, 6/16		・ギャラリートーク / 講師：山本宗補氏	30, 41	
5/16		ボランティアガイド学習会「東京大空襲を中心とする空襲について - この間の調査の成果を中心に」 講師：山辺昌彦氏 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員・学芸員)	30	
5/22		戦後 70 周年記念国際学術シンポジウム「欧州連合司法裁判所の役割」(後援) 「欧州連合司法裁判所判例が国内法に及ぼす影響」/ 講師：ロルフ・シュトゥルナー (フライブルク大学法学部教授)	55	
6/19		前期 NGO ワークショップ「あなたのお金どこへ行く? ～私たちができる平和創造のための投資～」 講師：田中優氏 (未来バンク事業組合理事長)	24	
7/4		ボランティアガイド学習交流会「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動することパート3」 講師：安齋名誉館長	44	
7/26		親と子の平和イベント ～「へいむ」ってなに?? 2015～ 創作劇「ぞうのはなし」、「ムッチャんの影絵劇」、紙芝居、理科・図工	86	
7/28～8/2		平成 27 年茨木市非核平和展 みんなで考えよう世界の平和 貸出教材「さいころくん」を通して見る世界 / 茨木市立中央図書館	オープン	
7/29～		小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会 (6 日間 / 7/29、7/30、8/18、8/19、8/20、8/21)	106	
8/15		声に出す平和への祈り ～伝えよう未来へ、平和の守り手として～ 朗読とスライド上映 立命館土曜講座	60	
8/22		・歴史に学ぶ、「戦争の気配」の感じ方 / 講師：加藤陽子氏 (東京大学文学部教授) / 以学館 1号ホール	672	
8/29		・永続戦レジームと戦後の終わり / 講師：白井聡氏 (京都精華大学人文学部専任講師) / 以学館 1号ホール	471	
9/19		世界報道写真展 2015 ・開催記念講演「報道写真家の仕事」 - マス・メディアの伝えない「真実」 沖繩・辺野古、高江の現状 - 講師：森住卓氏 (フォトジャーナリスト) / 以学館 2号ホール	110	
10/4・6		・関連企画 レクチャー&コンサート「ワードコンサートと講演会 ～レバノンから遠く離れて～」 講演：ワエル・クデ氏 ワード演奏：ヤン・ピタル氏、ワエル・クデ氏、仲野麻紀氏		
10/4		京都会場：国際平和ミュージアム 1階ロビー	83	
10/6		滋賀会場：エボック立命 21 1階ロビー	44	
10/9		国際言語文化研究所連続講座「70年目の戦後史再考」(共催)	-	
10/1～12/13		秋季特別展『戦後を語る 70のカタチ』 ・平和の缶バッチプレゼントキャンペーン (12/25 まで延長)	-	
11/7		・映画上映会「家族」/ 充光館 地階 301 教室	48	
11/3		ボリス・シリュルニク講演会・シンポジウム「自分を救え、命があなたを呼んでいる」(共催)	-	
11/12		世界平和アピール七人委員会 2015 年講演会「新しい戦前を作らないために - 戦後 70 年の世界と日本 -」 講師：土山秀夫氏 (長崎大学名誉教授; ビデオレター)、池内了氏 (名古屋大学名誉教授)、高村薫氏 (作家)、大石芳野氏 (写真家)、池辺晋一郎氏 (作曲家; 代読)、武者小路公秀氏 (国際政治学者)、小沼通二氏 (慶應義塾大学名誉教授) モンテ・カセム、(立命館大学国際平和ミュージアム館長) / 以学館 2号ホール	250	
11/23	韓国ノグンリ平和記念館と立命館大学国際平和ミュージアムとの学術交流協定締結調印式	19		
11/23	韓国ノグンリ平和記念館と立命館大学国際平和ミュージアムとの学術交流協定締結記念講演会 「人権と平和のために」 - ノグンリ虐殺の真相を究明する活動 - / 講師：チョン・クド氏 (ノグンリ平和記念館館長)	31		
12/5	後期 NGO ワークショップ「難民問題の解決に向けて ～ JVC の活動を基に考えよう～」 講師：並木麻衣氏 (JVC (特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター))	17		
12/6	映画「エイリアン・ブルー 浮島丸サコン」特別上映会・立命館大学「不戦の集い」関連企画 (共催)	-		

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

「ミュージアムだより」は、今号から全体によりコンパクトで読みやすい広報誌をめざして、表紙や誌面を刷新しました。世の中にインターネット情報が氾濫する中でも、紙媒体のメリットを最大限活かし「読み物」としての充実をはかろうと、戦争と平和に関する諸問題や資料が物語る歴史について、様々な切り口からアプローチした内容を活字として発信しています。ミュージアムが設立をめざす平和研究センターに関する特集、憲法発布 70 周年にちなんだ収蔵品紹介、安齋名誉館長の名物連載「巻頭つれづれ」、新副館長ご挨拶、運営委員の先生方からの多彩な寄稿記事、学生スタッフ紹介など、今号も興味深い記事が満載です。今後もより一層誌面の充実をはかることで、読み手の皆さんの興味・意識が喚起されたり、その内容を他者と共有したり、あるいはミュージアムへの関心が高まることをめざして、コミュニケーションツールとしての広報誌の魅力を高めていきたいと存じます。引き続き皆様からの忌憚のないご意見、ご提言よろしくお願いたします。(編集局)



国際平和ミュージアムでは、立命館大学の学生が2階の常設展示を案内(ナビ)しています。今回、学生スタッフとして実際に活動している桑野真実さん(法学部3回生)と林知美さん(文学部1回生)にいくつか質問していきたいと思います。

—なぜ学生スタッフをやってみたくて思ったのですか？

桑野：1回生の時に基礎演習の授業で訪れ、実際に学生スタッフにナビしてもらったことが印象に残っていて、自分もやってみたくて思いました。

林：興味を持ったため、説明会に参加しました。そこで、業務を通して平和や世界の問題などについて学ぶことができると知り、応募しました。



世界のさまざまな問題について、さいころ状の展示物を使って案内しています

—では実際に学生スタッフとして活動してみてどうでしたか？

林：平和関連や時事問題、ナビに関連した記事を掲示する「地球は今」という展示コーナーのための新聞切り抜き作業を通して、自分の関心や視野が広がっていると実感できています。ま



林知美さん(左)、桑野真実さん(右)

た、来館者の方々からも多くのことを学べます。初めてのことばかりで、まだまだ先輩方のようにはいかないのですが、日々努力を重ねています。

桑野：最初は先輩のナビを参考にしながら、今では自分で勉強したことも加えたナビをして、伝えたいことが伝わったときはとても嬉しく思います。相手に伝わるナビを考えることにとてもやりがいを感じます。

—最後に、おすすめの2階展示は何ですか？

桑野：「京都平和史跡めぐり」のマップです。京都の戦争や人権問題に関わる場所をいくつか紹介しているので、ぜひマップをみて実際にその場所を訪れてみてください。

林：私は、「ガラスのうさぎ」※という本の展示を見ていただきたいです。私はこの本を小学生の時に読み、衝撃を受けました。他言語に翻訳されたもの、映像化されたものに関する展示もあります。今なお読み継がれ、平和を伝え続けている作品です。

このほかにもさまざまな学部、回生の学生スタッフが活動しています。ぜひ一度国際平和ミュージアムにご来館ください！私たちと一緒に「平和」について考えましょう。

※「ガラスのうさぎ」：1977年12月に金の星社から出版された高木敏子の児童文学。作者自身の戦争体験をもとに、ひとりの少女が戦争を乗り越え生き抜いていく姿を描いた作品。200万部を超えるロングセラーとなる。

利用しませんか？ 貸出教材キット

2012年度から運用を開始した貸出教材キットは、児童や生徒が授業を楽しく深く学ぶための道具です。子どもたちが手に取ることができる複製の資料、先生が利用できる授業案等をセットにし、学校団体向けに無料で貸し出しています。

- 1 現代社会の諸問題を示唆するデータを紹介している「現代(さいころくん)キット」
- 2 戦争の実態や当時の社会の様子を知り、平和の大切さについて考える「一五年戦争(慰問袋)キット」
- 3 核兵器と原発という核エネルギーの異なる利用方法を一体に理解できる「原子力と私たちの生活」パネル

キットは上記の3種類あります。2015年度は24の学校や団体にご利用いただきました。申し込み方法など詳細は、ホームページ「教材キット&パネル貸し出し」をご覧ください。



「現代(さいころくん)キット」

ミニ企画展示 企画募集

このたび2005年から始まったミニ企画展示が100回目を迎えました。これまで50を超える学内外の団体や個人が主催となり企画を実施してきました。今後も広く学生や市民による平和活動を発信する場として活用していただき、市民参加型のミュージアムづくりをめざしたいと考えています。

現在、2017年4月、5月、6月開催の企画を下記の通り募集しております。この機会にぜひご応募ください。

展示期間 2017年4月・5月・6月開催

応募(申請)期間 2016年9月15日～9月30日(必着)

審査 2016年10月

結果通知 2016年10月末～11月初め

応募(申請)方法

- ・「展示企画申請書」をミュージアム事務室の窓口へ持参または郵送で提出(受付はミュージアム開館時間に準ずる)。
- ・応募(申請)前に必ずホームページで全ての書類をご確認ください。
- ・会期は各月2～4週間程度です。
- ・上記期間以外のお申し込み(申請)は受け付けません。

※2017年9月・2018年1月開催分は、2017年1月15日～1月31日に募集します。

詳しくは、ホームページ「ミニ企画展示応募方法」をご覧ください。

INFORMATION

2016 年度秋季特別展

「絵葉書にみる日本と中国：1894-1945」

会 期：2016 年 10 月 1 日（土）～12 月 11 日（日）
開館時間：9：30～16：30（入館は 16：00 まで）
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階 中野記念ホール
休 館 日：月曜日（但し、10 月 10 日（月・祝）は開館）
10 月 11 日（火）、11 月 4 日（金）、11 月 24 日（木）
参 観 料：大人 400 円（350 円）、中・高生 300 円（250 円）
小学生 200 円（150 円）
※常設展もあわせてご覧いただけます。
※上記（ ）内は 20 名以上の団体料金です。
※関西文化の日 11 月 19 日（土）・20 日（日）は入場無料です。

開催趣旨

日清戦争から第二次世界大戦終結までの約半世紀、日本は中国大陸への侵出を進め、やがて侵略戦争を起こして敗北するという結果に終わりました。この間、日本と中国は互いをどう捉えていたのか、世界はこの時期の日本と中国をどう見ていたのでしょうか。日清戦争、日露戦争、義和団事件、21 か条の要求、パリ講和会議、満州事変、日中戦争などの日本、中国に関する歴史的出来事が絵葉書及びその他の資料にどの様に描かれていたのかを追います。

本展は、世界的な絵葉書コレクターであるドナルド・ラップナウ氏の絵葉書コレクションの日本初公開となります。絵葉書を中心に、戦争柄の着物や風呂敷、情報宣伝に用いられた資料など、ラップナウ氏のコレクションからの出品を中心に展示を展開します。多くの課題を残す日中関係について考える機会となることを願い開催するものです。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、KBS 京都、朝日新聞社
京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

■講演会のお知らせ

二松啓紀氏（立命館大学経済学部客員研究員）による講演会を予定しております。

詳しくは、ホームページをご覧ください。



絵葉書：日露戦役三十周年陸軍記念日



伝単：半死的蛇也會咬人 絵葉書：満洲国治外法権撤廃記念



立命館大学国際平和ミュージアムだより
第 24 巻第 1 号（通巻 68 号）2016 年 8 月 19 日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL:075-465-8151 / FAX:075-465-7899
<http://www.ritsumeai.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>